



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オーストリア=ハンガリー二重帝国の構造と特質（三）－ハンガリーの立場を中心に－
Author(s)	矢田, 俊隆; YADA, Toshitaka
Citation	北大法学論集, 26(1), 61-87
Issue Date	1975-07-16
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/16189
Type	departmental bulletin paper
File Information	26(1)_p61-87.pdf



オーストリア「ハンガリー」二重帝国の構造と特質 (三)

——ハンガリーの立場を中心に——

矢 田 俊 隆

目 次

はしがき

- 一 学説史的展望
- 二 政治的結合と経済的発展の問題
- 三 帝国兩半部の経済成長の比較
- 四 共同関税地域の影響(以上第二五卷第二号)
- 五 ハンガリー経済成長の前提
- 六 外国資本の役割——第一期
- 七 外国資本の役割——第二期
- 八 経済面の總括的考察(以上前号)
- 九 改革時代のジェントリー(以下本号)
- 一〇 ジェントリー階級の衰退

- 一一 ジェントリーの退廃と反動化
 - 一二 ブルジョアジーの性格と役割(以下次号)
 - 一三 マジャール人と従属諸民族の対立
 - 一四 民族運動と社会運動の接点
- むすび

九 改革時代のジェントリー

ハンガリー史研究の第一人者マカートニー教授は、その著「ハプスブルク帝国、一七九〇〜一九一八」のなかで、「ハンガリー社会の著しい特徴は、一九〇三年になつてもなお、それ自身の見解と利害をもち、しかも国家構造の不可欠の部分を構成するミドルクラスを、欠いていたことであつた」と述べている。しかしこの命題は、われわれが前章までに確認した、十九世紀後半の——特にアウスグライヒ以後の——急速な経済的発展と、どのように関連するであらうか。本章に続く諸章の課題は、この問いに答えるために、十九世紀中葉以後のハンガリーのミドルクラスの実態と性格を検討し、彼らがなぜ社会と政治を近代化する真の推進力たりえなかつたかを、明らかにすることである。

この時期のハンガリーのミドルクラスを問題にすると、われわれはそこに二つの異なる要素を見いだすことができる。その一つは、bene possessorati ないしジェントリーを中心とする中・小地主階級であり、いま一つは、新興の商工業ブルジョアジーである。一八四八〜四九年の革命に先立つ時期に、いわゆる近代的改革運動の先頭に立ったのが中・小地主階級であつたことは、一般に認められているところである。しかし彼らは、どのような意味で近代化の推進者であつたのか。また十九世紀後半には、彼らはいったいどのような役割を果たしたであろうか。まず、この点の考察から出発することにしよう。

ハンガリーは、一五二六年以降ハプスブルク家を君主に戴いたが、ハプスブルク王国領内の他の非ドイツ地域に比べて、かなり特殊な特権的立場を認められ、独自の憲法とそれに基づく有力な身分制議會の伝統をもち、一応の自治を行なってきた。オーストリアが絶対主義国家として中央集権政策を押し進めたヨーゼフ二世の時代にも、ハンガリーはその渦中に巻きこまれず、五二の州議會とハンガリー地方議會を中心に、ハプスブルク家の官僚政治と中央集権を極力阻止したために、ハンガリーにおけるハプスブルク家の支配は、一種の制限君主政ともいべきものにとどまったが、これは、実際には、マジヤール人貴族の根強い力を示すものにほかならなかった。

マジヤール人貴族には、この民族の移動³に定住期にさかのぼる旧貴族と、その後ハプスブルク家によってつくられた新貴族の別があり、身分の高低や経済的⁴の大小の差もあったが、全体として単一の集団を成し、すべての貴族は同一の基本的権利をもち、法の前には平等 *una eademque nobilitas* とされた。その全人口中に占める比率は高く、一八四六年にハンガリー貴族は一三六、〇九三家族から成り、十七才以上の成年者は三三六、八〇七人に達したといわれる。³ 彼らの特権の根拠は、一二二二年に国王アンドラーシュ二世の発布した、ハンガリーのマグナ・カルタといわれる *Aurea Bulla* であり、これによって彼らは、王を選び、課税・十分の一税を免れ、彼らの権利が侵された場合の王への反抗権さえも保証されていた。特に注目されるのは、ハンガリー貴族の特権が封建的契約ではなく征服権に基づくことであって、そこから、財産の永久不可侵という原則が導き出されたが、この原則は、特定の所有地を越えて所有者の人格にまで及んだから、その後の取得物も同様に奪うことのできぬものとなった。⁴ これが大所有地⁵の生まれる根拠となり、大貴族の権力はこうした大所有地に基づいていたのである。しかも、貴族の特権の基礎となつた征服権は、ハンガリーにおけるマジヤール人の優越を正統化し、この優越は、マジヤール人の農民さえも理解し維持しようとしたものであった。ハンガリーは、支配民族であるマジヤール人のほかに、クロアチア人・セルビア人

・スロヴァキア人・ルーマニア人などを含んでいたけれども、マジヤール人ないしマジヤール人気質の支配階級は、彼らの国家を多民族国家とはみず、ハンガリーの存在はそのマジヤールの性格の維持にかかっていると信じていた。

ハンガリーの貴族は、土地を所有し、上流社会に属するという特殊な感情をいだいた点で、たしかに封建的であり、自己の特権を守ろうとする決意、出生によって得られた身分的優越に対する確信、行動のパターン等において、共通なものをもっていた。「紳士はけっして急がないし、驚きを示さないし、借金を払わない」といった諺、服装や話し方のマンネリズム、他人に対する横柄な態度などは、封建的な貴族全体にわたる特色を示すものであり、こうした貴族の単一性ないし共通性が政治的にも時に重要な意味をもったことは、否定できない。

しかしそれにもかかわらず、実際には、貴族はけっして均一ではなく、はつきりした階級の差を含んでいた。そこで次に、貴族の内部構成、特に上級貴族と中・下級貴族の差異に目を向けなければならない。ハンガリー貴族の頂点に立ち、社会的にも経済的にも最高の地位を占めたのは、マグナート Magnaten (magnás) であった。皇族、公・伯・男の称号をもつ家柄がこれにあたり、所有地の面積も巨大で、一般貴族と区別されていた。なかでも最大のエステルハージ Esterházy 公は、十九世紀前半には、一六〇の市場と四一四の村落を含む二九の所有地をもち、年収八〇万ないし一七〇万フロリンにのぼった。それに続くバッチャニー Bathányi 公は七、シナ Sina 男とカーロイ Károlyi 伯はそれぞれ一九、セーチェーニ Széchenyi 伯は一八の所有地をもち、これら五つのマグナートの土地だけで、合計五五〇オーストリア平方マイルにのぼり、そのほか四一マグナート家の所有地が、合計三二八平方マイルに達していた。各五、〇〇〇ホルド以上の土地を所有した貴族は、五五〇にすぎなかったといわれる。⁽⁶⁾

マグナートは大地主であったばかりでなく、多分に封建領主としての性格をもっていた。農民は領主の地域に居住し、一七六七年マリアテレジアの公布した *Urbanum* (領主と農民の関係を示した規則) によって、家畜ととも

に年間五二日の賦役を行なうか、もしくは、一〇四日の手働賦役を行なわねばならなかった。その他日雇い労働者も使われ、季節的には、クロアチア人・スロヴァキア人などの移民労働者も使用されていた。

マグナートは一般に保守的で、旧来の土地経営方法を容易に変更しようとはせず、十八世紀にラーコーチ Rakóczi の反乱が鎮定されて以後は、独立の精神を失い、自己の特権と支配力を維持するためにあらゆる改革に目を閉ざす一方、利害関係からウィーンの宮廷やオーストリア貴族と手をつなぎ、結婚政策でその結びつきを強化していった。このようなマグナートが官僚・教会・軍隊の首脳部を独占し、上院を支配し、行政の中枢に位置したために、ハンガリーは時代の進展から取り残されざるをえなかったのである。

マグナートの下位には、中型の所有地をもつ *Bene Possessionari* があつた。彼らは、称号をもたない貴族の上層部分で、二〇、〇〇〇ないし三〇、〇〇〇家族から成り、貴族全体の約四分を占めていた。大部分は地方の素封家で、経済的には比較的安定しており、地方行政の中心勢力をなし、地方長官に任命されたり下院議員に選ばれたりすること、少なくともなかった。彼らの間には、教養を身につけ、西ヨーロッパ風の啓蒙的合理精神に目ざめて、マグナートの封建的支配に反発して基本的な改革を望むものも、数を増しはじめていた。

その下に、次第に影響力を強めてきた小地主 *amellistae* があり、その数は、貴族階級のほぼ半分にあつていた。彼らもまた地方議会や州の行政に関与したが、比較的新しく貴族に列せられた連中が多く、貧困ではないまでも、控えて目地味な生活を送っていた。彼らは州行政機関の下級官吏、聖職者、法律家、医者、教育者などになり、貴族層以外の出身の知的職業人と交わる機会をもっていた。当時の著名な著作家、政論家、政治家たち——セメレ *Bartholomew Szemere*、サライ *Ladislaus Szalay*、チンゲリ *Antony Csengery*、ブルスキー *Francis Pulszky*、マハンスミルティ *Michael Vörösmarty* 及びコッシュネート *Lajos Kosuth*——が、生計のために働かねばならぬ小貴

族の出身であったことは、注目に値する。エートヴェス Joseph Eötvös, ケマーニ Sigmund Kemény も貧しい家族の出身であり、こうした事情が彼らの変革への関心を強めたことは、推察にかたくない。⁽⁸⁾

さらにその下にサンダル貴族、農民貴族、プロレタリア貴族などよばれる零細地主貴族の一群があり、貧困のためさまさまな職業につかざるをえなかったが、下院の選挙権をもち、自己の利益にかなう人物に票を投じていた。最下層に非土地所有貴族があり、生きてゆくためにあらゆる職業につき、みじめな場合も少なくなかった。ハンガリー軽騎兵の将校がしばしばこの階層から出たことは、よく知られている。⁽⁹⁾

一八三〇年代にはじまり一八四八〜四九年の革命期に頂点に達したハンガリーの改革運動は、このような背景のうえに理解されなくてはならない。では、この運動はどのような性格をもち、どのような担い手に導かれたのであろうか。

ナポレオンが没落したあと、ウィーン体制下のハンガリーでは、当初「時代の精神」は無視されていたが、やがてここにも変革の風が吹きはじめ、一八三二〜三六年の議会では「新しい反対派」が力強く姿を現わし、いわゆる「自由主義的ナショナルリズム」を主張しはじめた。これは外部からの刺激によるところが大きく、とりわけ大きな影響を与えたのは、一八三〇年におこったポーランドの独立革命であった。ハンガリー議会ではロシアに反対する決議が行なわれ、州議会や新聞でも親ポーランド的意向が表明され、その後も議会は、ポーランド人の運動を立憲的自由のための戦いとみて、同情を示し続けた。しかし、同時にまた「新しい反対派」登場の背後にはいくつもの国内的要因がはたらいていたことも、見のがされない。

第一は、マジヤール語による民族文学の出現である。ハンガリーがマジヤール人を中核とする国であることは、歴史を通じて一貫していたけれども、十九世紀のはじめ頃までは、ハンガリーはなお一つの超民族的な貴族社会として

の一面をもち、一八〇五年に二九七の非マジャール人マグナートが数えられたことは、これを物語っている⁽¹⁰⁾。この国の公用語はラテン語であり、さらに、マリアッテレジアやヨーゼフ二世の啓蒙専制君主時代には、教育・文芸などでドイツ化政策が進められたために、国民文化は沈滞の方向をたどった。当時のハンガリー人有力者の間では、子弟を教育のためウィーンに送り、ハブスブルク宮廷の近衛兵として勤務させるのが、一般的風潮となっていた。

これに対して、十八世紀後半、ロマン主義の強い影響を受けながら、「マジャール化」追求熱が高まりはじめた。ヨゼフ二世の統一主義とそのドイツ的性格に対する反動として、ベッセニエイ G. Besenyei が最初にハンガリー文学を開拓してマジャール人の団結を説いたあと、この運動はカジンツィ F. Kazinczy に引き継がれて、ハンガリー文化の再発見に幾多の成果をあげた⁽¹¹⁾。これらのロマン主義作家は、誇りをもって自国語に本質的価値を見だし、マジャール人社会の存続はマジャール語の保持に依存すると考えた。それゆえ、マジャール語はマジャール文学の復活は最初から政治意識を伴っており、ハンガリーの民族的自覚は、単なる文化運動を越えて政治・社会運動に発展する可能性を含んでいた。事実、一八三〇年代の「自由主義的ナショナルリズム」の目標の一つは、ラテン語に代わってマジャール語をハンガリーの公用語とすることである。それは「ドイツ化」に対抗する防衛策であると同時に、マジャール人に比して多数を占める非マジャール人大衆からの潜在的脅威に対する保障という意味を含んでいたために、次第に力を増していった。しかしこの運動は、なお文化的覚醒の段階にとどまっていた領内非マジャール系諸民族の間にも同じ傾向を刺激することになり、民族的対立の悪循環に寄与する結果となった。その意味で、改革時代のハンガリーの「自由主義的ナショナルリズム」には、当初から重大な限界ないし困難がつきまとっていたのである。

第二は、封建的なハンガリー経済の構造的改革の必要が自覚されはじめたことである。すでにみたように、ハンガリーでは農奴の賦役労働による商品生産的な大農場が発達し、東・西ヨーロッパに農・工の分業関係が成立したこと

と相まって、この国は、農産物の輸出を通じて、発展しつつある世界市場へ徐々に引き入れられていったが、それとともにこの国の地主は、すでに最小限の資本家的属性を獲得していた。しかし彼らは、所有地からの収入を増そうとしたとき、無数の問題に直面しなければならなかったし、こうした困難の多くは、その地域の経済的・社会的後進性に由来するものであった。

まず、ナポレオン戦争後の農業危機に直面して、ハンガリーの地主は、自己の農場に投資を行ない、また自己の使用する無償農民労働力をふやす必要に迫られたが、しかし、彼らがその所有地を近代化することは容易ではなく、とりわけ中型の地主にとっては、土地改良に必要な資金を借りることは、まことに困難であった。十九世紀の中葉以前には、ハンガリーには近代的な信用制度が欠けており、近代的なクレジット法も存在せず、また貴族の所有地は相続人を限定されていたため、抵当に入れるわけにはゆかなかつたからである。他方また地主は、穀物の生産費を引き下げ、もしくは牧羊業を拡大しようとする必要があつたが、それは、従来農奴に与えられていた土地の——時には非合法な——取戻しを意味したから、農奴の不幸を増す結果になつた。こうして、投資とクレジットの問題、資本主義的生産と農民に対する新しい態度の問題が、大きくクローズ・アップされたのである。そのほか、適切な交通機関の欠如もまた重大な障害であり、中世的な輸送網は、農産物を西欧の市場に送ることを極度に困難にしていた。¹³⁾

このような悪条件に伴う経済発展の緩慢さは、ハンガリー人を刺激して、自国経済の近代化に強い関心をいだかせたが、ハンガリー地域がハプスブルク王国内の西部諸州に比して経済的に甚だしく貧困でありかつ遅れているという認識は、同時に、ハプスブルク家の支配に対するハンガリー人の反感を増大させた。ハプスブルク家は、ハンガリー貴族に税金支払の義務を免除していたとはいいなから、ウィーン政府が、西部諸地方の発展を促すための経済政策や関税政策を故意に採用したことは、ハンガリー人の不満と憤りをいっそう激化させた。こうして、ハンガリー土地

貴族の近代化に対する要望はナショナルリズムの感情とからみ合うことになり、やがて一八四八～四九年の革命と独立戦争に帰着するのである。三月前期のハンガリーで、経済的・社会的秩序のブルジョアの改造と民族的独立の達成とが、不可分につながり補足しあう運動であり目標であったことは、注目する必要がある。¹³⁾

次に改革運動の担い手に目を向けよう。ハンガリーは当時なお工業期以前であり、西欧型ミドルクラスブルジョアジーはほとんど欠けていたから、貴族が指導的役割を果たすはかなかったが、その際前面に現われたのが、大貴族と中・小貴族の対立関係である。上述の近代的進化にかんするかぎり、マグナートと中・小貴族の間には、利害の共通点がないわけではなかった。そのため、一八三〇年代から革命期にかけて、両者の関係は微妙な動搖を示しているし、一八四八年四月の最初のハンガリー内閣が最大級のマグナート出身のバッチャーニを首班にいただいたことは、マグナートと中・小貴族の妥協を物語る好例としてしばしばあげられる。しかしそれにもかかわらず、両者の対立関係をあいまいにすることは、許されない。三月前期の改革運動の代表者セーチェーニは、マグナートの指導下にハンガリーを進歩的に改造する考えをもっていたが、自由主義的改革を好んで支持したのは、この社会層のごく少数にとどまり、大部分がマグナートから成る議会上院は、行政府の指令に従って、「反対派」の努力の多くを失敗させることに成功した。一八三九～四〇年の議会には、改革に反対しない若い保守派が現われたといえ、ハンガリー国民の政治的リーダーシップは、中・小貴族——とりわけ *bene possessionarii*——の手に移った。マグナートとそれ以下の地主の間には、元来伝統的な競争関係があったうえに、ハプスブルク家との関係にかんする政治的感情の違いが、さらにこの対立を強めた。一般に中・小地主の方がより民族的であり、これに反してマグナートは宮廷にいつそう近く立場にあり、彼らの精神的視界にはより多く全王国がはいつていた。一八四八年に先立つ時期の間に、貴族の一部はかつての貴族的同質性のかなりの部分をすでに失っており、これらの中・小貴族が「急進化」して、改革運動のイニ

シアタイプを握ったのである。

十九世紀前半、ハンガリーの知識階級は、伝統的な貴族的ミドルクラスにジェントリーの一部を成し、その社会的出身と政治的エトスの点で、広範な一様性をもっていた。少数の上級貴族出身者や、農民ないし稀薄なブルジョアの庶民層からの上昇者も含まれてはいたが、彼らも、ジェントリーの知識層の広大な一様性を侵害することはできなかった。ただし、当時都市地域にブルジョアジーおよび貴族以外の知識階級が緩慢ながらも増加しつつあったことは事実であり、上述した貴族の一部の「急進化」がある程度その影響をうけもしくはそれを前提としたものであったことは、推察されるが、この点はなお、学問的に十分明らかにされていない⁽¹⁾。いづれにしても、三月前期の知識階級の中核はジェントリーの出身であり、彼らは、国民生活の内部で、西欧の諸理念をハンガリーに媒介する重要な役割を演じたのであった。三月前期の教養ある進歩的ハンガリー人を感じさせた魅力的な言葉の一つに *Polstárosodás* (ブルジョア的な地位と文明の達成) があったが、これを取りあげはじめたのは、主として中・小貴族階級であり、彼らによって、これが改革の基本目標とされたのである。ジェントリー貴族層出身の知識人が進歩的なブルジョアの自由主義運動の担い手となったことは、まことに特徴的であり、「改革の時代」の指導者の大部分は、彼らの内部から出てきたのであった。

ここで、進歩的の改革運動ないし「自由主義的ナショナリズム」の掲げた具体的目標をまとめてみよう。

第一は、ラテン語の代わりにマジャール語を行政と立法の公用語にしようとする要求で、これについてはすでに触れた。

第二は、中央集権化の実現である。エートヴェスや一八四〇年代の集権主義者たち——サライ、チェンゲリ、トレフォルト *August Trefort* など——は、州レベルや地方議会における貴族の政治的独占を打破するために、また、真

に代議的な議会に責任を負う政府を樹立するための第一歩として、自治都市の市民を政治に関与させようとし、州のいかさま自治や「サンダル貴族」⁽¹⁶⁾に攻撃を加えたが、これはまさに憲法上の革命を意味するものであった。こうした批判が行なわれたことをみても、当時の自由主義が単なる外国思想のうのみではなく、それをハンガリーの実情に適応させるための真剣な努力が払われていたことが、知られるのである。

第三に、「反対派」の主要な目標の一つは、一般課税の導入であった。彼らは一般課税を、法の前の平等、すべての社会階級の「利害の統一」*örökösök*などの原則を実現するための、予備的な一つのステップとみていた。その際、コッシュュートが、非マジャール系農民を「利害の統一」計画のなかに含めた最初の人物であったことは、注目に値する。しかし、保守的な政府は政治的譲歩を行ないたくなかったし、また、自由主義者が有意義な改革を通じて農民を味方に引き入れるのを許したくなかったから、サンダル貴族を操って一般課税の導入を妨げたのである。

第四に、その他の主要な目標として、(1)農奴が自己の耕作地に対して負う諸義務を、領主に適当な補償を行なうことによって強制的に買い戻すこと、(2)特権のない人々に徐々に市民権を拡大すること、などがかけられた。

これらの目標は、一八三〇年代の初期に、セーチェーニ、ヴェッセレーニ *Wesselényi*、ケルチュエイ *Kölcsey*、コッシュュートらによって定式化されたものであり、三月前期の「反対派」の綱領の核心をなしたものであって、要するに進歩的な貴族階級は、幾多の社会改革を取り入れることによって国家の構造を近代化し、新しい民族国家の基礎を揚げようとしていたのである。

第五に、ハプスブルク王国内で、また国際関係のうえで、ハンガリーの地位をいま一度明確化しようとする要求が、つけ加えられた。その主要な動機の一つは、「北方の巨人」ロシアに対する恐怖と、そのロシアが、数でまさるハンガリー内非マジャール系諸民族の汎スラヴ的・汎ギリシア正教的傾向を支持することへの不安であった。ヴェッセ

レーニ、エートヴェス、コッシュユートはいずれも、ドイツ的要素とマジャールの要素の結束の必要を説き、同時にまた、オーストリアが立憲国家に改変されることを強く要望した。

「反対派」グループの綱領に掲げられたこれらの社会政治的目標は、一八四八年の革命前には、ただ一つを例外として、法律化されることはなかった。例外とは、一八四四年にマジャール語がハンガリーの公用語とされたことであり、これは、半世紀以上にわたる闘争のちによりやく獲得されたマジャール民族主義の勝利であったから、セーチェーニのような穏健保守派を含むすべての愛国者に、歓呼をもって迎えられた。しかしこの勝利が、先にも述べたように、新しい民族間の危機の前夜に、マジャール人と非マジャール系諸民族の間の裂け目をいっそう大きくするものであったことは、否定できない。

以上の考察を要約すれば、次のとおりである。十九世紀前半のハンガリーの改革運動は、中・小貴族層をその担い手としたものであり、その諸目標は、たしかにマジャール民族主義の偏狭さを内包していたし、また相互間に若干の矛盾がないでもなかったが、大体においてハンガリー国家の近代化をめざす進歩的・自由主義的な内容のものであったといつてよいであろう。ではそのジェントリー層は、一八四八〜四九年の革命期を経たあと、どのような役割を果たすことになるであろうか。

(1) C. A. Macartney, *The Habsburg Empire 1790—1918*, London, 1968, p. 708.

(2) 以下の叙述は、とりわけ次の諸研究に負うところが多う。C. A. Macartney, op. cit. ; Bernd and Ránki, "Economic Factors"; Georgy Barany, "Hungary: the Uncompromising Compromise." 邦語では廣實源太郎「三月革命におけるハンガリー」『西洋史学』五五号、一九六二年、がある。

(3) 成年男子総数は三、六九〇、九七三人であったから、九の強にわたっている。Jerome Blum, *Noble Landowners and Agriculture in Austria, 1815—1848*, Baltimore, 1948, p. 36.

- (4) Peter F. Sugar, "The Nature of the Non-Germanic Societies under Habsburg Rule," *Slavic Review*, Vol. XII, 1963, p. 6 f.
- (5) Arthur J. May, *The Hapsburg Monarchy 1867—1914*, Cambridge, Massachusetts, 1960², p. 231.
- (6) ハンガリー全体の面積は四、一六〇平方マイルであったから、マダナートの所有地がいかにも巨大であったかが理解されよう。面積の単位について付記すれば、1 hold = 1 yoke = 0.576 hectare = 1.43 acres, またオーストリア平方マイルはイギリスの二二・一三九平方マイルにあたる。Maartney, op. cit., p. 835 参照。(一平方キロメートルは一七三・四七九六ホルドに等しい。)
- (7) Blum, op. cit., p. 89, 182—3.
- (8) Barany, op. cit., p. 237. 要するに、中級貴族と貧困貴族に共通したのは、貴族としての誇りとマダナート支配に対する反感であり、貧困貴族の家に生まれてその苦悩を体験したロッシュェートこそは、まさに下級貴族を地盤とし「小貴族の知性を代表した」人物だったのである。
- (9) Blum, op. cit., p. 37.
- (10) Blum, op. cit., p. 36.
- (11) ハンガリーでは、当時なおブルジョアジーはきわめて少なく、覚醒の主体は貴族であった。しかも彼らのうちには反ドイツ的感情をもつものが少なくなかったから、結局ハンガリーのロマン主義的文化運動は、進歩的な貴族の手で進められざるをえなかった。D. Siner, *History of Hungary*, London, 1959, p. 248 参照。
- (12) 本稿『北大法学論集』二五ノ四、三〇五—三〇六ページ参照。
- (13) Berend and Rakhi, "Economic Factors," p. 165 f. 同じ箇所です、著者は「東欧では、ナショナリズムは、ミドルクラスの発展があらゆる種類の障害によって妨げられた時に、よみがえったのである」と述べている。(p. 164)
- (14) これについては、G. Barany, "The Hungarian Diet of 1839—40 and the Fate of Szechenyi's Middle Course," *Slavic Review*, Vol. XXII, 1963, pp. 286—290, 295—298 参照。
- (15) Barany, "Uncompromising Compromise," p. 238 参照。
- (16) サンダル貴族の数は、約二二五、〇〇〇人とされる。Barany, op. cit., p. 239.
- (17) *ibid.*

一〇 シェントリー階級の衰退

一八四八年の春、ハンガリー人は、以前には考えられなかったもろもろの譲歩を、ウィーンの宮廷から獲得した。わずか数週間のうちに、彼らは、議会に責任を負う独立の内閣をもち、その議会は、教育と財産を資格とする選挙権で選ばれることになった。これは、従来の身分制議會に比べて大きな進歩であり、有権者の割合は、従来の一・七%から七・九%に高まったと推定されている。さらに、あらゆる封建的特権および隷屬制に終止符がうたれ、農民は解放され、彼らのほぼ多は土地を与えられた。宗教的自由は拡大され、トランシルヴァニアはふたたびハンガリーと結合され、また国民軍 Honvéd が設けられた。

しかし、王朝とハンガリーの間、またマジャール人と非マジャール人の間に妥協が可能であるようにみえた「奇跡の時代」は、実際には、まもなく二つの戦争によっておしつぶされねばならなかった。その一つは、一八四八年夏の危機の間に出現した急進左派が、コッシュュートをいただいて行なった民族独立戦争であり、いま一つは、それと密接に関係した、ハンガリー内のマジャール人と非マジャール系諸民族の間に戦われた内乱であった。

一八四八年四月七日に誕生したハンガリー最初の独立内閣は、マグナート出身のバッチャーニを首班として各派の民族主義者を網羅しており、実権は蔵相コッシュュートの手に握られたとはいいながら、マグナートと中・小貴族の妥協的連立内閣といった性格をもち、マグナートを利用してゆこうとするコッシュュートの態度が、表現されていた。しかしやがて反革命が各地で勝利をしめ、オーストリア皇帝がクロアチア人を後援してハンガリー政府に圧力を加えるに至って、事態は急変した。こうした状況のもとで急進左派が力を得、やがてコッシュュートは、全ハンガリーのマジャール化と完全な自主権の確立をめざして温和派を排斥し、事実上の独裁権を樹立した。ハンガリーの二面戦争を担当したこれらの人々が、独立したマジャール民族国家を打ち立てることのむずかしさを過小評価していたことは、否定できない。

それ以後翌四九年夏に至る時期のハンガリー革命で指導的役割を演じたのは、中・小貴族であったが、彼らは自由主義的な法治国をつくり出すための努力を続け、農奴制の廃止もコッシュユートの指導下にはじめて法制化されたし、他方ハンガリー議会は、ハンガリーの完全独立とハブスブルク家の失権を宣言した。その際、中・小貴族を基礎にした急進左派が民族的独立の努力を押し進めたことは、理解にかたくないが、しかし彼らが、みずからの特権剝奪を意味する身分的秩序の廃止に力を入れたのは、何故であろうか。それは、一部は彼らの「ロマン的熱狂」ないし「時代精神」への感受性から説明できるが、他の動機もまた大きく作用していた。オーストリア皇帝との武力対決は、ハンガリーにとってかつてない重大な試練であったから、革命の指導者たちは、自民族のあらゆる力を利用する必要がある、従来政治的に無権利であった人々をも獲得しなければならなかったのである。さらに、広範な貴族の中間層は、革命の過程で手に入れた自己の指導権を、以後ウィーンに対してのみならず国内のマグナートに対しても主張しうるという期待をもって、自由主義路線を邁進したのである。

しかしながら、一八四九年の夏、ハンガリーの民族独立戦争はツァーリの力を借りたオーストリア軍の手で鎮圧され、貴族の中間層の希望は充たされることができなかった。独立戦争失敗後のハンガリーは、オーストリアの単なる一属領と化し、民族的自由はまったく奪われ、クロアチアやトランシルヴァニアはハンガリーから離されてそれぞれ帝国の一州となり、ウィーン政府の派遣するドイツ人総督の統治をうけることになった。ハンガリー地方議会の権限も極度に縮小され、官庁や学校ではふたたびドイツ語が用いられた。

とはいえ、ハンガリー独立戦争の失敗は、一八四八年の自由主義立法の完全な取り消しには終わらなかつた。一八五三年五月新絶対主義政権の発布した土地台帳勅書 *urbairial patent* は、一八四八年四月の基本原則を取り入れたものであって、ハンガリーの約三、一〇〇、〇〇〇人の農民とトランシルヴァニアの約三二〇、〇〇〇人の農民が、恩

恵に浴した。⁽⁴⁾農奴制が廃止され、貴族の特権の多くが削減されたことよって、大所有地を賃金制にもとづく資本主義的経営に変えることは、ある程度まで可能になり、したがって四八年革命の目標は、社会のブルジョアの改造にかんするかぎり、ある程度実現されたといつて差しつかえない。ただし、契約による農奴、小屋住みの小作人 Cottier tenants、農業労働者など、ハンガリーで五、五〇〇、〇〇〇人、トランシルヴァニアで七〇〇、〇〇〇人弱が土地なきままに放置された結果、その後もハンガリーは、依然広大な所有地と土地なき農業労働者の国であり続けるのである。⁽⁵⁾

農民解放のあとを追って、旧来の限定相続法を廃止し、小区画農地の強化を命じ、土地登録簿を確立するなどの諸法令が發布され、これを補足した。これらの方策は、オーストリアの民法典がハンガリーに拡張され、行政組織が改められ、一般課税が導入され、ハプスブルク王国両半部の間の内閣税が撤廃されたことと相まって、従来ハンガリーの資本主義的發展を妨げていた頑強な障壁のかなりの部分を、取り除いた。要するにフランツ・ヨーゼフ帝は、一八四八年に始まった社会変革を後退させることなく、反対にそれを完成の方向に向け、農民解放およびそれと結びついた土地改革をこえて、全帝国を統一的経済圏とするための、そして特に、経済・金融生活を近代化し促進するための、重要な方策を講じたのであった。その後の著しい経済成長については、すでに検討済みである。

ところで、このような新事態は、ハンガリーの地主貴族にどのような影響を及ぼしたであろうか。⁽⁶⁾一般に地主は、農民解放に際して四〇年間にわたつて政府の証券で補償されたけれども、新事態の及ぼした影響は、伝統的なマグナート階級と中・小地主階級とでは、大きく違っていた。まずマグナートは、制度的・社会的に依然指導的立場を維持したし、経済的にもむしろ好都合であった。彼らの所有地は自由私有地 allod の占める割合が大きかったから、土地改革は多くの場合彼らにわずかな打撃しか与えなかったし、他方彼らが規則正しく受け取った補償金は、自身の所有

地の近代化を可能にしたばかりでなく、彼らはまたそれによって、農民に譲渡したより以上の土地を、近隣の貧しい人々から買い取ることができた。さらにクレジットの入手も、五〇年代以後は、彼らにとって比較的容易であった。

こうした事情のもとで、一八四八年以前にも大きな割合をしめたマグナートの巨大な所有地は、以後数十年間のうちに、実際にはさらに増大した。一八九五年の調査によれば、当時ハンガリーとクロアチアで耕作可能な土地の面積は、四、一七〇万ホルドであったが、そのうち一、二〇〇万ホルドは、四、〇〇〇以下の地主に——その大部分は個人であった——、一件あたり一、〇〇〇ホルドないしそれ以上の所有地という形で、保持されていた。森林や牧草地をそれに加えれば、巨大な所有地の割合はいっそう大きくなるであろう。巨大な個人所有地の例を若干あげるならば、エステルハージ公の土地は五一六、〇〇〇ホルド、シェーンボルン Schönborn 公の土地は二四一、〇〇〇ホルド、カローイ伯一族の土地は一七四、〇〇〇ホルド、フェステイクス Festetics 公の土地は一六一、〇〇〇ホルド、フリードリヒ Friedrich 大公の土地は一四五、〇〇〇ホルド、コーブルク＝ゴータ Coburg-Gotha 公の土地は一四一、〇〇〇ホルドに達し、これらの所有地のかんりの部分は、特別に相続を限定されていた。フランツ・ヨーゼフ王が一八六七—一九一二年の間にあらたに六〇の世襲財産 *fidei-commissa* の形成を認めたので、それは全部で九二となり、ハンガリーの土地の三五％は相続を限定されることになったのである。⁽⁸⁾

これに反して、中・小地主貴族は、一八四八—四九年の政治的・経済的激動のあと、マグナートはどうまく生き残るわけにはゆかなかった。中型地主については、*bene possessionati* という古い名称に代わって、一八七〇年代半ばから新しくジェントリー *gentry* という呼び名が登場した。ジェントリーの明確な定義は存在しないが、大体において二〇〇—一、〇〇〇ホルドの土地所有者と考えられ、その数は一八九五年で約一〇、〇〇〇、その内訳は、五〇〇—一、〇〇〇ホルドの土地所有者が三、二〇〇、二〇〇—五〇〇ホルドの土地所有者が六、七〇〇であったと

中型面積の地主は、依然その所有地の一部を保持し続けたけれども、ハンガリー経済を変えはじめた資本主義の発展から利益を得ることができず、大所有地経営者との競争に耐えかねて、衰えていった。そのうえ、新絶対主義の時代はハンガリーが政治的権利を剥奪された時期で、ジェントリーはその地位をひどくゆるがされたが、とりわけ一八四八年後の数年間は、ハプスブルク家のさまざまな抑圧政策に苦しまなくてはならなかった。以下これらの点を、やや立ち入って考察しよう。

まず第一に、農奴解放による賦役の廃止は、中型地主から無償労働力を失わせてしまった。それと関連して、第二に、賦役制下の農奴は一般に彼ら自身の道具を使用していたので、中型の地主たちは、自己の土地を耕すのに必要な用具もなく、また、農場の備品を買うための資金もない状態におかれてしまった。オーストリア政府は、農奴制の廃止にあたって、取りあげられた土地の地主に補償金を支払ったとはいいながら、一八四八〜四九年の革命期にハンガリーの中型地主がウィーンに強い反抗の態度を示したことへのこらしめとして、彼らにはごくわずかな支払額しか割りあてなかったために、彼らが受け取った金額は、以前免税をうけていた彼らの土地にあらたに課された税金を支払うにも、足りなかった。彼らはまた資金の借入れが困難であり、それが可能な場合にも、一八〜二〇%という高い利息を支払う必要があった。こうした資金の払底のほかに、近代的な農業方法についての知識も不足していたから、結局彼らの農場経営は拙劣であり、新しい経済的要求に適應することができなかった。⁽¹⁰⁾ 彼らの浪費的な生活習慣も、マイナスの要素として働いた。ただ、クリミア戦争およびアメリカ南北戦争中の穀物価格の高騰は、穀物ブームを生み出し、それが再三彼らを不幸から救ったけれども、大勢は彼らにとって不利であり、他方農業上の不景気は、彼らに決定的な打撃を与えた。こうして彼らの絶望的状况は増大し、かつての *bene possessionati* の多くは農場経営を断

念せざるをえなくなり、その数は急速に減少していった。次の統計は完全なものとはいえないが、十九世紀後半の中型所有地の急速な衰退ぶりをうかがわせるに足るものである。⁽¹⁾ 一八四八年以前、土地持ちのジェントリーは約三〇、〇〇〇人であったが、一八六七年までに、二〇〇〜一、〇〇〇ホルドの土地所有者の数は一五、〇〇〇人以下になり、一九〇〇年頃までに一〇、〇〇〇人以下に減少した。しかもこの公的資料は、それらの土地の内情を示してはいないから、中型所有地の衰退ぶりは、この統計的数字から想像される以上のものがあつたと考えられる。

それ以下の小貴族をみれば、農奴解放後は、彼らの所有地はもはや彼らが独立の地主であり続けることを可能にするだけの大きさではなくなっており、彼らおよびその子孫たちは、農業プロレタリアートの隊伍をふくらませる結果になつてしまつたのである。おそらく、以前の貴族階級のかなりの部分が、このカテゴリーに属したと思われる。

十九世紀の前半、ハンガリー民族運動の進歩的勢力を代表して、この国の経済の近代化に心を傾けたマジャール人のジェントリーは、こうして急速かつ冷酷に、物質的地位をそこない、貧困化していった。多少の躊躇はあつたにせよみずから資本主義的発展の開始に力を貸し、その促進にリーダーシップをとつた社会層が、その後かえつて資本主義的発展の勢いに押しつけられ、みずから資本主義の道を追いつけることの不可能を悟らされたということは、まことに運命の皮肉であつた。では、これらの衰退した旧ジェントリー階級は、いったいどのような態度をとろうとしたのであろうか。

(1) Brany, op. cit., p. 241.

(2) その結果、貴族は課税を免れることができなくなり、他方農民は領主支配から独立することになり、賦役と十分の一税も廃止された。

- (3) Victor Concha, *La Gentry, sa genèse et son rôle en Hongrie*, Budapest, 1913, p. 13.
- (4) Barany, *op. cit.*, p. 242 f.
- (5) *ibid.*
- (6) 十九世紀後半の状態と二十世紀初頭の状態を比較するのには、次の論文が有益である。P. Hanák, "Skizzen über die ungarische Gesellschaft am Anfang des 20. Jahrhunderts," *Acta Historica*, X/1—2 1963, S. 6—27.
- (7) ほかに「ローマニカトリック教会、市町村なども大地主であった。なお当時ハンガリー王国の全面積は五、六五〇万ホルド（＝三三五、〇〇〇平方キロメートル）であった。Macartney, *op. cit.*, p. 713.
- (8) *ibid.*
- (9) Macartney, *op. cit.*, p. 715.
- (10) Concha, *op. cit.*
- (11) P. Hanák, "A dualizmus korának néhány vitás kérdésé," *Századok*, 1962, No. 1—2, p. 218; Berend and Ránki, *op. cit.*, p. 168.

一 一 ジェントリーの退廃と反動化

それにはまず、彼らのメンタリティをみなければならぬ。一八四八〜四九年の革命後成立したオーストリアの新「絶対主義」体制は、旧来の特権や自治を廃止し、ハプスブルク帝国をよりよく管理された中央集権国家にしようとしたが、それは特に、ハンガリーのジェントリーに強い抑圧としてのしかかった。この時期に、独立戦争に失敗したあとの彼らジェントリーの取りうる道は、いわゆる「消極的抵抗」でしかありえなかった。彼らは、皇帝の行政官庁の命令に目をつぶり、生活必需品だけを生産し、いっさいの民族的なもの、過ぎ去ったものの神秘化のうちに逃避したが、こうした態度は、一方で物質的貧困化を促進するとともに、他方でジェントリーおよびジェントリー知識層

の精神的水準を必然的に退化させる結果になった。こうした物質的衰退と精神的退廃とがからみ合つて、政治的態度のうえでも、この階層がかつて担つた進歩的性情を失わせていったのである。

ハンガリーの内部事情もまた、これを促進した。すでにみたように、シュントリーの伝統的な生活の基礎を脅かした同じ事情のもとで、大土地所有者であるマグナートは、まったく損害をこうむらないか、こうむつたにしてもその程度ははるかに軽微であつたし、他方工業ブルジョアジーが新しい経済的変化から大きな刺激を受けたことは、いうまでもない。こうして、マグナートとブルジョアジーの社会的・経済的競争の谷間におとされて強く圧迫されたシュントリーは、財産および政治的・社会的勢力のうえでなお自分たちに残されているものを、少なくともそれだけは保存しようとする気持におちこんでいった。

このような状況のなかで、シュントリーの保守的な基本態度が形成された。改革時代の自由主義貴族は、ブルジョア化 *enbourgeoisement* を本質的・積極的価値をもつ進歩的な努力目標とみて、自国の近代化を主張したのに、いまやこの態度は一変し、彼らはもはや、ブルジョアの改革のために戦うことをやめ、過去の経済的慣行に好意を示し、封建時代から生き残つてハンガリーの近代化の主要な障害となつていた多くの政治的・経済的特権を擁護するに至つた。要するに、以前の *bene possessionati* および小貴族の大部分は、一八六七年のアウスグライヒまでに、彼らの経済的安定と政治的勢力とを失なつており、そこから、彼らの世紀末的な態度と、彼らが伝統的に信頼をよせてきた前工業的価値体系を永続させようとする努力とが生じたのである。このことは彼らのナショナルリズムにも妥当した。革命以前の中・小貴族の民族主義運動は、資本主義の発展と一致していたのに、いまや彼らは、ロマン主義的・反資本主義的な、同時にまたきわめて攻撃的な民族主義思想の魅力に、次第に強くとらえられていった。多民族国家ハンガリーにおいて、マジヤール民族主義がその当初から他の諸民族に対する経済的・政治的・文化的抑圧と手を携えて進

んできたことは、すでに指摘したところであるが、ジェントリーの変貌は、このマジヤール民族主義の燃え木をいっ
 そう強くかき立てることになったのである。⁽³⁾

ところで、ジェントリーのこのような保守的基本態度は、具体的には二つの形をとって現われた。その一つは「保
 守的利益政策」*Konservative Interesspolitik* とよばれるものであり、つまり「前進防衛」*Vorwärtsreidi-*
gung とよばれるものである。⁽⁴⁾ まず前者をみよう。ジェントリーの土地がもはや彼らに生計の余裕を与えなくなった
 とき、彼らは広範な社会的視野を失い、みずからの社会層のせまい利益をひたすら追い求めるようになった。貧困化
 したジェントリーの多くは、新しい職業を求めなくてはならず、小銀行家、大学教師、文士、軍隊の士官などになっ
 たものも少なくなかったが、彼らのいっそう好んだ仕事は文官勤務の役人であって、多数のジェントリーがそこに殺
 到した。その際にみられた「縁者びいき」ないし「親族登用」*Vetierwirtschaft* とよばれる現象は、まさにジェント
 リーの保守的な利益政策を示すものであった。その独自の代表者は、一八七五年から九〇年まで十五年間の長期にわ
 たって首相の地位にあったカールマーン・ティサ *Kálmán Tisza* であって、彼自身ジェントリーに属したティサは、
 地主の息子たちがいなかを去るのと同じくらいの速さで、彼らを吸収するための国家のポストをつくり出し、それによ
 って自己の出身階級を救済しようとした。そのため彼は、はげしい非難をうけなければならなかったほどである。⁽⁵⁾

ウィーンによるハンガリーの権利剥奪は一八六七年に陸止され、ハンガリーは完全な自治を獲得し、立憲君主国と
 して再出発することになったが、これはジェントリーにも好都合であった。アウスグライヒ後、ハンガリーでは新し
 い議会政治が始まり、国家機構が整備されていったために、「身分の低い貴族」には、行政部と立法部でかなりの程度
 に活躍する機会が与えられ、彼らは政治的意味をとりもどすとともに、自分たちの利益を効果的に擁護する可能性を
 もちえたのである。

このことは、同時にまた、ハンガリーの官僚政治に特殊な性格を賦与することになった。一八六七年後、ジェントリーは中央および地方自治体の諸官庁に殺到し、彼らの住所・職業・直接の経済的利害は著しく変化した。しかしそれにもかかわらず、彼らの社会観は、「薄気味わるいほど」従来と変わっていなかった。マカートニーによれば、彼らがハンガリーを管理することの報酬として受け取った俸給が、もはや農民から直接彼らに支払われるのではなく、國家に集められたうえで彼らに支払われるようになった点が、違っているだけであった。なお、文官勤務のなかには、古いドイツ人市民の家族や富裕なシェヴァーベン農民の家族もいくらか含まれてはいたが、上級公務員の大多数は旧来の地主階級およびその子供たちであったから、彼らと出身の違う人々も、完全に彼らと同じ社会的見解を採用したといわれる。行政官階級は、ハンガリー・ミドルクラスの一部をなし、十九世紀末頃には国民生活のなかではなほだ重要な役割を果たすようになっていたが、その役割はけっして自主・独立のものではなかった。諸官庁に殺到したマジャール人のジェントリーが、中央および地方の官僚政治に彼らの「ジェントリー」的な見解と生活様式を強く刻印したからである。のみならず、この「ジェントリー」的な社会観と生活様式は、折柄その層を次第にあつくしつづつあったハンガリーのミドルクラス一般の、注目すべき特徴ともなったのである。

次に、ジェントリーの保守的な基本態度の第二の表現形態である「前進防衛」に目を向けよう。それはもとより第一の要因と不可分に関係していたが、ただ、極端な民族主義的イデオロギイの衣服をつけて現われた点に、ユニークな特徴があった。その主張によれば、あらゆる社会的・政治的害悪の根源は、オーストリアと鎖で繋がれていることのように、すなわち、現在の「アウスグライヒ」の形態のうちに求められねばならず、ハンガリーは完全な國家主権と経済的独立をもつ場合にはじめて、人々の望むような國家になることができるはずである、と論じられた。特色ある新聞「調和」Egyszerűs紙のある論説は、次のように述べていた。「われわれのあらゆる困難の、またわれわれを

脅かしているあらゆる危険の原因は、われわれの力が現在の国法的状態のなかで不幸にも麻痺していることである。
 ……⁽⁹⁾

アウスグライヒのあと、地方の地主貴族はハンガリー議会の主要な構成分子をなしたが、⁽¹⁰⁾ ジェントリーにみられる上述の二つの傾向——「利害政策」と「前進防衛」——は、議会の政党活動のうちにもはっきりと認められる。一八七〇年から一九一八年に至る時期に、一九〇五年から一九一〇年までの短期間を除いてほとんど大部分政権を担当したのは、「自由党」*Szabadelvi Part*であり、それに対する唯一の取るに足る反対党は、「一八四八年」独立党」*Fejérségetlenség* *Part*であった。大ざっぱに言って、「自由党」は、大地主およびかなりの大きさの地主、大実業家およびかなりの大きさの実業家、マジャール人の手にあるほとんどすべてのものの利害を代表し、「独立党」は、前者よりもいくらかよりはっきりと、ジェントリーおよび都市の自由主義者たちを代表した、といわれている。⁽¹¹⁾ これをジェントリーの側からみれば、彼らのうち温和な保守的政策によって最も容易に自己の利益をみたすことができると思つた連中は、自由党に集まつた。この政党のなかには、「資本家仲間」出身の「近代的」「経済的」な考え方もするグループも根をはっていたが、明らかに保守的。「農業的」な貴族グループ、なかならずく広範なジェントリー中間派の力がまさつていた。この政党の政治的態度をみれば、その時々自由主義的な流行語でまずくおおわれていたとはいいいながら、⁽¹²⁾ 実質的にはジェントリーの保守主義が支配していた。⁽¹³⁾ 他方、民族主義的な過激論は、政府に反対する少数派「独立党」のなかで成長していった。この党の主張が、——少なくとも理論的には——同君連合の弱いきずなを除いてオーストリアとの連鎖を切断するにあつたことは、周知のとおりである。この政党も、一部富裕なマジャール人農民や資本家から票を得ていたとはいへ、大体においてジェントリー層を基盤にしていたことは、たしかである。しかし、この政党の民族主義的非妥協性を、一般的な世界観としての急進主義にはぐくまれたものと考ええることは、誤りである。な

るほどこの政党の綱領は、「自由党」のそれよりもいっそう急進的な一連の諸要求を含んでいた。このことは、いわゆる民族的諸要求についてだけではなく、とりわけ普通選挙権の要求が示すように、社会的な領域についても認めることができる。それにもかかわらず、「独立党」の自由主義は、実質的には、政府党の自由主義とほとんど違わなかった。一八八三年に、「現代ハンガリー」の「棚おろし」“Bestandaufnahme” vom “modernem Ungarn”の編集者は、この国の政治的指導者階級の外面的な政治信条にふれながら、正當にも、これらの階層は「ほとんど例外なくリベラルである」と書いている。「諸政党を（実際に）分けたり合わせたりする……ものは、オーストリアに対する多少とも親密な関係について人々が抱く觀念のうちに表現される、国法上の信条である。」⁽¹⁴⁾

このように原則的・世界観的な対立が欠けていたために、結局のところ議會での闘争は、ほとんどただ、「六七年党」——自由党はしばしばこう呼ばれた——のアウスグライヒに対する忠誠と、「四八年党」のアウスグライヒに対する敵意との衝突によって規定された。事実問題も価値判断もすべて、それがオーストリアとハンガリーの関係という主題にどう関連するかといった視点に、従えられることになった。しかもこの主題について二大政党の立場は一致しなかったから、このような基準の絶対化は、議會を、たえず不名誉で非生産的な論争のくり返される舞台に低落させずにはおかなかった。民族主義的反対派は、国民の間に自党への支持が次第に広がってゆくのをみて、ますます過激化していったし、政府および与党は、同じく非妥協的な態度でそれに答えた。扇動的な民族主義が広がり、相手方が独裁的にふるまうほど、二大政党の対立は、それだけいっそう、見せかけの問題をめぐる奇妙な争いになっていった。議會における議員たちの行動は、あたかもある特殊な社会層の熱狂する闘士たちの姿を思わせるものがあり、彼らにとっては、相手方の策略をつねに抜け目なく凌駕することだけが問題であるように思われたのである。しかし、こうした「政治的スポーツ」⁽¹⁵⁾の間に、ハンガリーの支配者階級はこの国の現実の重要な問題を無視し、また一般に、

近代的な時代思潮である「進歩」との接触を失ってしまった。彼らの闘争は、一八九九年にティサ政府の危機をもたらし、それと関連して内政状態をますます悪化させていったが、これらの闘争のすべてのうちに、ハンガリーの貴族的自由主義の危機が映し出されていた。一八四〇年代に古典的・生産的な形で成立した貴族的自由主義は、十九世紀後半ジェントリーの衰退とともにその進歩性を失い、二十世紀の前夜には、極端な民族主義と権威的な保守主義に分裂する危険な兆候を示していたのである。

本章の課題は、ハンガリーにおけるミドルクラスとしてのジェントリーの地位と役割を検討することであった。以上の考察をふまえて、われわれは比較的容易に、この問題に答を与えることができる。十九世紀前半の改革時代において、ハンガリーのジェントリーは、たしかに近代化の促進者として進歩的な役割を果たした。しかし一八四八〜四九年の革命の結果生じたもろもろの変化は、ジェントリーの政治的・社会的地位を大きく変化させた。彼らは経済的に衰退するとともに、精神的に退化し、政治的に反動化していった。十九世紀の最後の頃の時期におけるハンガリーの社会は政治状況の特徴は、一八四〇年代に始まった「自由主義的」革命が、以前それを進行させたと同じ社会層によっていまや停止させられた、という点に要約することができる。ハンガリーのジェントリーは、けっして社会や政治を真に近代化し民主化する推進力とはなりえなかったのである。

(一) J. Farkas, *Der Freiheitskampf des ungarischen Geistes 1867—1914*, Berlin, 1940, S. 18; Tibor Sälé, *Sozialdemokratie in Ungarn*, Köln, 1967, S. 10.

(二) 本稿『北大法学論集』二五ノ四、三一一—三二二以下参照。

(三) Berend and Ránki, *op. cit.*, p. 168.

(四) Sälé, *op. cit.*, S. 4.

(五) May, *op. cit.*, p. 231.

- (6) Macartney, op. cit., p. 709.
- (7) Macartney, op. cit., p. 708.
- (8) マグナートの子供たちが官僚政治にはいっても、他の人々と同等の条件で苦勞しながら階段をのぼらねばならなかった。Macartney, op. cit., p. 714 f.
- (9) これとの関連で、次の点も注目に値する。旧ジェントリー階級衰退の結果、一九〇〇年のジェントリーは、祖先との関係でいえば、大部分新しい人々の階層であった。しかし新しくジェントリーになった連中は、彼らの先輩たちの伝統的人生觀を驚くべく器用にかつ完璧に取り入れたために、二つの成分を識別するためには、系譜字者の目が必要である、といわれている。すなわち、ジェントリーの構成メンバーはすべて、長い間ハンガリーの国内運営についてマグナートと議論をかわし、そしてそれをマグナートと分担してきた古い bene possessionati の、真の後継者だったのである。Macartney, op. cit., p. 713 f.
- (10) Stile, op. cit., S. 5.
- (11) 当時はずでに議会の重要性は下院に移っていたから、マグナートの若い子供たちで野心的な連中の多くは、下院に政治的運命を委ねた。Macartney, op. cit., p. 714.
- (12) Kann, The Habsburg Empire, p. 70.
- (13) Stile, op. cit.
- (14) Ambros Nemenyi (Husz.), Das moderne Ungarn. Essay und Skizzen, Berlin, 1881, S. 274; Stile op. cit. Gratz の「フウグラライヒ後の年代には、實際、すべてのものは、保守派の小グループを除いて、デアーク党も、中央左派も、極端左派も、諸民族側もひとしく、自分たちをリベラルとよんだ。その心情においてリベラルでなかった人々さえも、それをあえて告白するとはなかった」と書いている。(A Dualismus Kora, 1. 90.) Macartney op. cit., p. 688.
- (15) 当時の有名な議員 V. Vaszonyi の一八九六年の新聞論説にみられる。Stile, op. cit., S. 6.
- (16) Oskar Jászi, Magyarians Schuld Ungarns Sünne. Revolution und Gegenrevolution in Ungarn, München, 1923, S. VI.